海難資料と沈船

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 中 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25638

海難資料と沈船

酒井 中

はじめに

突発的な事故や遭難によって遺跡が形成される沈没船は、モノの生産・流通をあつかう考古学においては良好な一括資料を提示してくれる。世界各地の海域で沈没船が発見・調査されているが日本海域ではこれまでのところ水中考古学の対象として発見・調査された事例を筆者は寡聞にして知らない。しかしながら、同海域において海難事例が古来なかったわけではなく、文献資料を見ると日本海海域に限らず日本各地での海難記録が数多く残されている。

しかしながら海は広大であり、海底に何が残っているのかまだまだ不明な部分が多い。

本稿では近世以前の海難事故・漂着物の取り扱いを整理し、文献資料から海難スポットを探るものである。

福井県下における海難記録の事例

ここでは、福井県下における中近世の海難事故記録を集成した。

金指正三氏（1968）は近世以前の海難事故に関する文献記述の集成を行ない、日本全国で 1302 件を資料化し、このうち福井県海域の海難記録は 21 件存在する。のちに上杉喜寿氏（1993）により、北前船の海難記録が集成されている。うち福井県に関するものは 115 件存在し、福井県海域での海難記録は 42 件見られる。

福井県内の県史・市町村史に見られる海難事故・漂着に関する記述は 73 件存在し、そのうち、福井県海域での海難記録は 31 件見ることができる。これらの記述を整理し、福井県内の市町村別に内訳を分類したものが図１であり、これらを地図上にプロットしたものが図２である。

発生地点としては、嶺北地方海域に海難事故が集中しているが、すでに確認されている文献記録の粗密の問題も考慮すると、かつて港町として栄えた土地の近隣で海難事故が多発していたと考えるべきであろうか。また、沿岸付近での海難事故はその発生が発見される確率も高いが、沖合での事故は発生当時に付近を航行中の船舶がなければ事故の場所も分からないため、実際にはさらに多くの海難事故が発生していたことが想像に難くない。

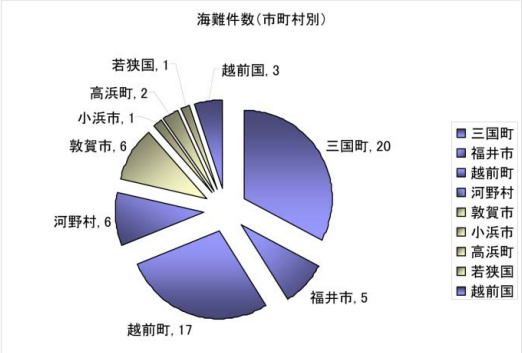

図１　近世以前の海難事故発生件数（市町村別）

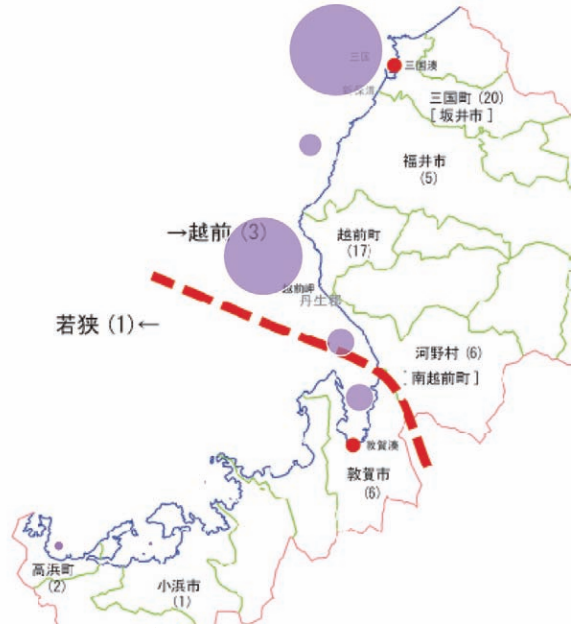

図２　近世以前の海難事故発生地図

文献に見る海難の記録

文献に記載された中世から近世の海難用語として、「寄物・寄船・流船・流物・破船・難船・膠船・水船・沈船・当逢（衝突）・打ち揚がり」 などが挙げられる。現代の海難救護法に相当する法律として「海上札」が江戸時代に数回発布されている。江戸幕府が発布したものだけでも寛永十三年（1636）、慶安四年（1651）、万治二年（1659）、寛文七年（1669）、延宝九年（1681）、宝永八年（1711）、正徳三年（1713）、宝暦八年（1758）など複数回に及ぶ。海上札には海難救助の義務が規されており、その内容は

・沿岸域における遭難船または港内外碇泊中の船舶に対し救助船を出す。

・海難に伴う漂流物または沈没品を取得し、荷主に返還する。

といったものであると同時に、海難救助活動に対する報酬額も規定されていたが、船舶・船具類は報酬の対象外であった。また、救助報酬請求権は、慣行上、海難救護処理に当たる浦方（瀬元・破船元）のみにあって、他浦が救助しても救助報酬がない場合があるなど、現代の海難救護法とは性格の異なるものである。

漂着物の取扱

次に文献に見られる漂着物の取扱いを概観してみる。漂着物に関する記述は『日本書紀』にまで遡ることができる。

『日本書紀』欽明天皇三十一（570）年夏五月の条では越の国に漂着した高句麗使人の調物を道君なる郡司が搾取した内容の記述がみられる。

『書記』斉明天皇五（659）年秋七月のくだりに遣唐使船が南海の爾加委島に漂着、大半が島民に殺害されたとの記述がみられる。

『扶桑略記』では後朱雀天皇の長久五（1044）年八月七日の条、および『百錬抄』宣徳二（1427）年八月十日の条に宋の商人張守隆の遭難物を但馬国司源章任が横領したことが記されている。

『微古文書（二）』には建仁三（1203）年七月、伊勢神宮領志州相佐須の船が暴風に遭い、同国麻生浦に寄り付いたところ、当地の住人壱志守房等が船および勝載物を盗み取ったとある。

『吾妻鏡』の貞応三（1224）年二月二十九日の条には高麗人の乗った船が越後国寺泊に漂着したことが記述されている。所持品の中には４字の銘がある銀簡の帯が見られ、明治時代にその銘が女真文字であることが判明している。

「宗像神社文書」では寛喜三（1231）年四月五日に宗像神社が筑前国遠賀郡葺屋津から糟屋郡新宮浜に至る海岸に打ち寄せられた漂着物を「漂濤の寄物」と称して同社の修理用途に充て用いたと記述されており、この行為は寛喜以前数百年来の慣行であったという。

「大乗院文書」に嘉元四（1306）年九月に越中国大袋庄東放生津の関東御免津軽船が越前国坪江郷佐幾良に寄港したところ、佐幾良・加持羅・阿久多宇三ヶ浦預所代左衛門次郎等が、漂倒船と称して大船１艘と積荷を奪い取ったとの記載が見られる。

「新田八幡宮文書（一）」康永年間（1342-44）に紀州船および積載物が薩摩において奪取されたという。「離宮八幡宮文書（一）」に応永六（1399）年、山城石清水八幡宮神人大山崎油商人の船が、摂津住吉浦に漂蕩したとき住吉の百章が積荷を奪取したとある。

このように遭難物占取の慣行は、律令制が崩壊し、中央政府の統制が弛緩し始めた平安中期以降に起こり、鎌倉時代に入って一般的慣行になった。

しかし、室町以降、地方武士の勢力が拡充し、領主化するのに伴い、寄船・寄物占取権は荘園領主の手に移行したが、守護領国制が進行すると、守護が入部権を有する荘園における寄船・寄物検断権は、中世末から近世にかけて守護によって奪取されていく。その過程を以下の文献中の記述に見てとることができる。

・「廻船式目」（文明前後の成立）の第１条
・「今川かな目録」に見る慣習法の成文化
・「東大寺文書」四の三一：延慶四年、東大寺寺僧および現地荘官たる保司は、東大寺知行国周防海岸の浮物に関し、それぞれ一定の得分を所有
・「住吉神社文書」：永禄十二年、小早川隆景は周防山口の住吉神社所有寄船を小倉城築城用に寄贈方を申し付けている。
・「陰涼軒日録」：長禄四年八月一七日、京都鹿苑寺領三河国赤羽郷に寄船があると、同国守護一色氏の郡代と同郷住民との間に寄船に関する紛争が勃発。
・『新編武蔵風土記稿』254：北条氏康が伊豆御蔵島に漂着した筑紫船や薩摩船の積荷を分国中の神社の修理料に充てた。
・「修福寺文書」：弘治三年、八丈島に漂着した紀州船に対し、38 人の乗組員が生き残っていたにもかかわらず、北条氏は積載物を没収し、破損船を伊豆修福寺の英順に与えた。

抜荷と海難

ただし、海難事故の記録の全てを額面通りに受け止めるべきではない。深井甚三氏（深井 2009）をはじめとする研究者たちに指摘されているように、抜荷の口実としての難船・破船事故が存在するからである。抜荷の口実としての海難事故を扱って研究事例として、以下のものが挙げられる。

深井甚三（2009）は、文政九年（1826）に中国へ漂流した越前国丹生郡下海浦の廻船宝力丸が遭った海難

事故の背景に薩摩藩の抜荷に関連する問題を指摘している。そのほか鏑木勢岐の研究（1927）を代表とする銭屋五兵衛の抜荷実行説に関する議論がある（註１）。

船体の転用

沈没船が発見されにくい要因として、腐食や風化、フナクイムシといった自然の営力、慣習としての漂着物の取扱い以外にも、船体の転用が挙げられる。陸上の遺跡で確認された事例として、井戸枠への転用が見られる。

たとえば、潤地頭給遺跡（福岡県前原市）出土の弥生時代終末期の準構造船部材、長保寺遺跡（大阪府寝屋川市）出土の準構造船部材、草戸千軒町遺跡（広島県福山市）出土の 13 世紀末から 14 世紀前半（鎌倉時代後期）の井戸枠に転用されたフナクイムシの痕跡を持つくりぬき材がそれにあたる。

また現存する建築物に船体の一部を建築材として転用した例を見ることもできる。たとえば舟板壁への転用例として、舟町通（滋賀県長浜市）の家屋板壁、宿根木集落（新潟県佐渡市小木地区）の重要伝統的建造物群保存地区の家屋板壁、北前船の里資料館（石川県加賀市）の外壁、専長寺（金沢市金石西）の茶室「松帆榭（しょうはんしゃ）」等が挙げられる。

それ以外にも、北前船のマストを山車の部品として転用した例（輪島市）などがある。

おわりに

日本の海で船体が発見例が少ない背景には環境的な要因以外にも海難事故に関わる人間の行為にもその要因を求められるのを確認できた。しかしながら全ての事故が文献に記載あるいは事故の発生が陸の人間に知られたとも思えない。沿岸部の踏査および水中調査によって明らかにされる海難事故・沈潜の痕跡を残す水中遺跡がまだまだ日本の海域にも存在するものと思われる。また、ケーススタディとして文献記録による、福井県内の海難発生地点としては航路上の様々な地点で発生しているものの、その多くは三国港を中心に交易の拠点となる港町の近隣で多発していることを確認した。

註

（１）遠藤雅子（1993）のタスマニアの文書館に保存されている捕鯨船の航海日記にもとづく銭屋五兵衛の海外密貿易説や、日置謙（1952）、木越隆三（1997）など。

参考文献

上杉喜寿　1993『能登・加賀・越前・若狭　北前船の人々』安田書店
内山正 編著 1983『国見の歴史』福井市国見公民館
越前町史編纂委員会 1977『越前町史』越前町
加藤貞仁　2002『北前船　寄港地と交易の物語』無明出版
小浜市郷土研究会　1986『小濱町誌』小浜市郷土研究会
金指正三　1967『近世海難救助制度の研究』吉川弘文館
河野村誌編纂委員会 1980 『河野村誌　資料篇一』河野村
河野村誌編纂委員会 1983 『河野村誌　資料篇二』河野村
河野村誌編纂委員会 1984 『河野村誌　』河野村
珠洲市史編さん専門委員会　1978『珠洲市史　第 3 巻＝資料編　近世古文書』石川県珠洲市役所
敦賀市史編さん委員会　1985『敦賀市史　通史編　上巻』敦賀市役所
敦賀市史編さん委員会　1988『敦賀市史　通史編　下巻』敦賀市役所
富来町史編纂委員会　1977『富来町史　通史編』石川県羽咋郡富来町役場
深井甚三　2009『近世日本海海運史の研究―北前船と抜荷―』東京堂出版
福井県大飯郡高浜町　1985『高浜町誌』福井県大飯郡高浜町
福井県 1992『福井県史』
三国町史編纂委員会　1964『三国町史』福井県坂井郡三国町役場
三国町史編纂委員会 1983『修訂 三国町史』国書刊行会

（金沢大学大学院後期博士課程　lapita13@msn.com）

表１　福井県下における海難記録

時期	西暦	場所	遭難船	状況	典拠
敏達天皇　二年	573	米の浦沈船淵	高麗使節船	破船	『越前町史』
応永十五年十一月十八日	1408	中湊浜	南蛮船、帝王の御名阿烈進卿	破船	『福井県史』
慶長九年	1604	新保	石見国城ヶ谷出身反子	漂着	『越前町史』
延宝六年一月十五日	1677	河野上ノ浜	今泉源二郎舟	難破	『河野村誌』
延宝七年	1679	越前海浜	越前丹生郡大樟浦伝兵衛の二百石と三百石積船	遭難破舟	『北前船の人々』
天和二年八月二日	1682	若狭湾田烏沖	加賀藩船一〇二〇石積の船	難船	『北前船の人々』
天和三年六月二十六日	1683	敦賀立石三里沖	坊州岩国舟頭水主共二捨人乗	着船	『国見の歴史』
貞享元年九月九日	1684	御国之内かれ崎沖	十三湊舟頭水主共二捨人乗	難船	『国見の歴史』
元禄五年	1692	安島沖	三国湊のこんたや善兵衛船	破舟	『北前船の人々』
元禄六年九月二十日	1693	白浜	加州宮腰舟新保舟	破損	『国見の歴史』
元禄七年	1694	若狭高浜沖	越前丹生郡新保浦由兵衛船	難破	『北前船の人々』
元禄九年十二月七日	1696	小丹生浦	三国舟頭四郎兵衛	難船	『国見の歴史』
元禄七年	1696	高浜	新保浦由兵衛船	難船	『越前町史』
元禄七年七月七日	1696	高佐浦	加州白尾村舟頭八兵衛船	難船	『越前町史』
元禄十三年二月二十二日	1700	越前沖	能登輪島湊松木屋九郎兵衛船	破舟	『北前船の人々』
元禄十四年	1701	越前沖	久末次郎左ヱ門船	破船	『北前船の人々』
元禄十四年	1701	新保浜	越後屋市右ヱ門船	破船	『北前船の人々』
元禄十四年	1701	越前左右浦	竹内助左ヱ門船	破船	『北前船の人々』
元禄十五年七月二十九日	1702	大丹生浦之内白浜	佐州赤泊村舟頭与左衛門二六人乗	破船	『国見の歴史』
元禄十六年十月二十一日	1703	今泉浦ノ前	敦賀生例町河舟甚助舟	難船	『河野村誌』
元禄十六年九月	1703	佐井岬	越前三国新保浦平右ヱ門の大船	破舟	『北前船の人々』
宝永一年	1704	三国沖	新保浦嘉左エ門船	難船	『越前町史』
宝永四年六月二十一日	1707	大樟浦	伯州御厨権十郎船	破船	『越前町史』
享保五年二月二十六日	1720	立石岬沖	若狭小浜湊須崎町舟主船頭和久屋源七	水船	『北前船の人々』
享保六年九月	1721	左右浦	加州石川郡宮腰の六兵衛船	破船	『越前町史』
享保九年四月	1725	新保浦	阿波の船	難船	『越前町史』
元文元年一月十九日	1736	丹生郡左右浦	若狭小浜湊茶屋久左ヱ門船	破船	『北前船の人々』
安永三年二月五日	1774	新保浦	敦賀久右エ門弁財船	難船	『越前町史』
天明六年六月十日	1786	越前玉川沖	加賀国宮腰湊板屋七兵衛船	遭難破舟	『北前船の人々』
寛政二年四月一日	1790	越前岬沖	三国米ヶ脇浦の小中屋与三郎船	破舟	『北前船の人々』
寛政三年七月七日	1791	新保浦	加州宮之腰、直乗船頭十兵衛船	破船	『越前町史』
寛政三年十月十日	1791	新保浦	加州粟崎与四右エ門船	破船	『越前町史』
寛政四年九月九日	1792	河野浦	六兵衛舟、名仁兵衛舟、孫右ヱ門舟、佐十郎舟	破舟	『河野村誌』
寛政四年五月十八日	1792	三国沖	越後国御城米積船	難破	『北前船の人々』
寛政五年四月四日	1793	立石岬	加賀宮腰浦福留屋安兵衛船五百石積	破船	『北前船の人々』
寛政五年四月二十四日	1793	高佐浦	越中国伏木浦鍛冶屋船右エ門船	難船	『越前町史』
寛政八年三月十六日	1796	越前丹生郡小樟浦の澗口	越後国青海湊沖船頭仁之助船	破舟	『北前船の人々』
寛政九年四月三日	1797	三国湊	出羽国御廻米船	漂着	『北前船の人々』
寛政九年四月十一日	1797	小樟浦浦澗口	敦賀茶町庄山船頭次郎兵衛船	破船	『越前町史』
寛政十年十一月八日	1799	敦賀	西登大船六艘・越前丹生郡新保浦林家船	破船	『越前町史』
文政四年八月四日	1821	宿浦	加州中釜屋村船頭十左エ門船・加州本吉船頭四十物屋市三郎船	破船	『越前町史』
文政七年八月十九日	1824	越前岬沖	加賀高牧浦米屋清兵衛船	破船	『北前船の人々』
文政九年十月六日	1826	敦賀湾内五幡沖	海浦七郎兵衛船	難破	『北前船の人々』
文政十二年	1829	本吉	道口浦百八十石積五人乗船	破船	『越前町史』
天保元年三月四日	1830	越前丹生郡四ヶ浦沖	加州笠積船	破舟	『北前船の人々』
天保三年二月二十九日	1832	米の浦	厨浦大橋伊左エ門弟与惣吉18歳・南三郎左エ門52歳	破船	『越前町史』
天保三年九月十二日	1832	大谷浦	加州宮脇船頭平左衛門船	丸ツぶれ	『河野村誌』
天保四年九月九日	1833	新保沖	加州宮腰長右エ門	難舟	『越前町史』
天保五年七月十二日	1834	海浦川下	海浦宝来屋庄兵衛大船	破船	『越前町史』
天保七年九月二十一日	1836	新保浦澗	能州松戸浦伊兵衛船・能州宮腰町湊屋佐太郎船・宮腰町井波屋佐兵衛船・宮腰町越前屋喜兵衛船	難船	『越前町史』
天保九年十月九日	1838	立石岬	越前丹生郡上宿浦吉郎次の七十石積船	遭難	『北前船の人々』
天保九年十月十四日	1838	経ヶ崎沖	宿浦吉郎次の水主共三人乗船	難船	『越前町史』
天保十三年三月二十二日	1842	高佐浦	加州本吉中内屋円右エ門船	破船	『越前町史』
天保十四年四月	1843	新保浦	加州宮腰達磨屋船	破船	『越前町史』
弘化三年二月	1846	左右浦	オランダ船	漂着	『越前町史』
弘化四年十一月十九日	1847	高佐浦	雲州神門郡赤塚仁右エ門船	難船	『越前町史』
安政四年十二月五日	1857	左右浦	隠岐国嶋前美田直乗船頭喜三郎船	破船	『越前町史』
安政六年三月十四日	1859	新保浦	宮腰町権左エ門船・宮腰町伊助船・宮腰町長三郎船・宮腰町与四郎船	破船	『越前町史』
安政六年四月一日	1859	玉川浦沖	三国船問屋加藤屋又兵衛船	破船	『越前町史』
安政六年十一月九日	1859	三国新保湊浜	浮囲中の船より出火、中浜屋利助ら船計八艘	焼失	『北前船の人々』
万延元年五月九日	1860	三国新保浦沖	加賀宮腰湊冬川町米屋平右ヱ門七人乗り	破舟	『北前船の人々』
～天明七年	～1787	不明	筑前船	破船	『三国町史』・『修訂三国町史』
丑七月二十五日	1697？	茱崎・大味境	加賀藩御城米船	破船	『国見の歴史』
酉九月二十七日	不詳	不明	船頭栄吉、船名は不明	破船	『河野村誌』